

---

# 使える！びっくり系怖い話

さすらいの旅猫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

使える!~びっくり系怖い話

### 【著者名】

Z5849M

### 【作者名】

さすらいこの旅猫

### 【あらすじ】

この夏にピッタリの怖い話です。さくっと読める長文なので気軽に読んでみてください^\_^

(前書き)

友達の前で使うと結構イケます。

林間学校最終日、俺の部屋である1号室から出て行く音が聞こえた。本人は忍び足で音を殺し、静かに行つたつもりらしいが、俺は気づいていた。

昔から寝つきが悪く、イベント事の前日何かは必ずと言って良いほど眠りにつくことが出来ない。ましてや、林間学校だ。俺が眠れるはずもなかつた。

そして、俺がこれから行つべき行動は1つ。寝れないだけじゃ、どうせ暇なのだから、今部屋から出てつた奴を尾行することにする。

部屋には4人いるのだが、やはり、1つのベッドが空いていてそこに寝ているべき人間がいなかつた。俺は一人呟く。

「こんな時間に、どうしたんだ・・・？」

急いで、しかし、音を立てないように今出でていった奴の追跡を開始する。

幸か不幸か、月の明かりがとても綺麗で深夜の1時過ぎだと書つのに周りはとても明るかつた。林間学校の側には林が生い茂つており、そこから沢山の虫の鳴き声がしていた。時折、俺の頬を撫でる風は生暖かく、とても気持ちの良いものではなかつた。

奴は真っ直ぐに1人で歩いている。しかし、足取りはハツキリしていて、

その歩調からは確固たる目的地を示して歩いていることが窺えた。

「あいつ、林間学校から離れて、どこ行く気だ？」

尚も追跡を続行する。そこで俺は、ある一つの事に気がついた。  
そう、奴の足は墓場へと向かっていた。

墓地に着くと、奴は辺りを見回す。何か探している様子だった。  
そして、ある墓の前でピタリと動きを止めた。

俺は近くのでかい墓石に身を隠しつつ、奴の様子を窺うこととした。

「さて、これから何をするのかな～？」

徐に、奴は、その墓石の地面を掘り返し始めた。素手で、何度も何度も

土を掘り、土をどけ・・・といつ作業を繰り返している。

奴の手は次第に泥にまみれ、爪の間には土が入り込んでいた。  
所々、指を切り、血も出ている様であった。

俺はまづい物を見てしまったと思った。気温はそこまで  
高くないのに、額に汗の感覚を覚え始めていた。背中にもじんわりと  
汗が出てきているのがわかる。

「何なんだ、あいつ。墓なんか掘り起こして・・・」

直感が、その場を離れると命令する。が、体は動かない。目はしつ  
かりと

奴に釘付けになっていた。

奴は、地面から壺を掘り出すと、その中から白い物を取り出す。

「まさか、あれって・・・」俺は目を見開き、唾を飲み込んだ。

そう、人骨だった。それを奴は不気味な音を立てながら食べ始めたのだった。とても、小さな音だったが、五感がとても敏感になつていて、俺には、その音がハツキリと聞こえていた。

体の中から何かが押しあがつてくるのを感じる。無意識の中に俺は、一歩、また一歩と後ずさっていた。しかし、尚も視線はその奇怪な行為へと向けられている。突如、足元から音がした。

「しまつた・・・！」

地面に敷かれた砂利を踏んでしまい、もろに音を立ててしまつた。奴の動きが止まる。ゆっくりと、立ち上がり、俺の方へと歩を進めた。

俺は砂利の音なんか気にせずに走り出した。動悸が、とても激しく鳴っている。心臓が口から飛び出しそうだつた。奴も俺を追い駆けてくるが、何のことはない巻いてやつた。いち早く自分のベッドに入り、呼吸を整え、奴にばれない様狸寝入りすることを決め込んだ。やや、遅れて、奴が部屋へ入ってきた。

何かやっている。何をやっているのかはわからないが、布団と布団の擦れる音がする。

(何だ? 何やつてるんだ?)

部屋の中を歩き回っている様子で、少しづつ俺の方へと近づいて来ているのがわかる。そして、声が聞こえた。

「お前じゃな～い・・・」

そして、布の布団と布団の擦れる音がした。

（もしや、顔で調べてるのか？だとしたら、まずい…）  
一層動悸が激しくなる。唇はかさかさに乾いていた。

また同じ音が聞こえてくる。布と布の擦れる音だ。

「お前じゃな～い・・・」

そして、奴の足音が俺のベッドの前で止まつた。

（頼む、何とかバレずに済んでくれ・・・！…）

すると、俺の布団の中に何かが入ってきた。

奴の手だ。それが心臓の上で止まっている。

広い間を置いてから奴は言った・・・。

「お前だ……」

END

(後書き)

最後の「お前だーー！」を大きい声で言つゝとでも聞きた手をぱざりせる話です。よければ使ってくださいー！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5849m/>

---

使える！びっくり系怖い話

2010年10月10日22時02分発行